

## 論文

# 農業生産物の市場価値と生産価格

——『剰余価値学説史』における——

東 井 正 美

はじめに

- 1 農業資本の低位な構成と土地所有
- 2 農業生産物の生産価格の形成
- 3 穀物の市場価値の概念とその規定

4 差額地代と市場価値

5 絶対地代と市場価値

あとがき

## はじめに

周知のように、マルクスの差額地代第1形態には、穀物の市場価格の決定をめぐる平均原理が限界原理かという問題と、差額地代の源泉——虚偽の社会的価値——をめぐる問題とがある。これらの問題と、直接的であれ間接的であれ、かかわっているのは、農業生産物の市場価値の規定並びに生産価格の形成なのである。これらについては、『剰余価値に関する諸学説』において詳細に論述されてある。この『諸学説』は、以下では、従来の呼び名である『剰余価値学説史』という名称を用いることにする。

農業生産物の市場価値の規定およびその生産価格の形成がとくに説かれているのは、『剰余価値学説史』Ⅱにおいてである。この「剰余価値に関する諸学説」の第2の部分<sup>1)</sup>は、1861—1863年草稿のノート第10冊（445ページ）から第13冊（752ページ）までから成るものである<sup>1)</sup>。『剰余価値学説史』Ⅱにおいて、穀物の市場価値およびその生産価格について考察するのは、上記の問題解明への新たな糸口をつかめば、という願望からでもある。

『剰余価値学説史』Ⅱ部においては、生産価格と価値とを同一視し、絶対地代を否定する、リカードの地代理論を徹底的に批判しているのである。マルクスは、資本の有機的構成の相違を導入して、農業生産物の価値はその生産価格よりも高く、諸資本にたいする土地所有の抵抗のために、農業生産物は、その価値どおりに売られ、最劣等部類の土地にも絶対地代が生じる、と説いているのである。マルクスは、この理論の骨組みのなかで、農業生産物の市場価値の規定および生産価格の形成を説いているのである。『剰余価値学説史』Ⅱにおいて説かれて

1)『経済学批判（1861—1863年草稿）』第3分冊、『マルクス資本論草稿集』⑥（大月書店、1981年）の「編集者例言」より。

いる農業生産物の生産価格の形成についての理論は、明快である。穀物の市場価値の規定に関しては、必ずしも明快でない。なぜならば、全体としては「平均原理」に立脚して説かれているが、ときには、「限界原理」で説かれているように見えるからである。こういった諸点について、マルクスの所説を、私なりに整序して、紹介しながら、明らかにしてみたい。これがとりもなおさず、本稿の課題である。私の問題意識としては、農業生産物の価値がその生産価格よりも高く、最劣等部類の土地にも絶対地代が生じうることと、土地所有の介入のため、農業生産物の価値はその生産価格に等しくならない、ということである。

ところで、『剰余価値学説史』Ⅱの邦訳としては、次のものがある。VERKE版の邦訳として、時永淑訳本(大月書店、1970年)がある。MEGA版の邦訳としては、時永淑・安田展敏の訳本(大月書店、1981年)がある。この訳書を本稿では、原則として使用する。引用頁は、原文中に示されてある手稿ノートのページを、(手稿—××ページ)という記号で、引用文の末尾に示すことにした。この手稿ノートのページで、いずれの原文や訳文の引用箇所も探しださせるからである。

なお、『剰余価値学説史』Ⅱでは、生産価格が「費用価格」と書かれてあるので、思い切って費用価格はすべて生産価格に書き改めた。

必要がある場合には、『資本論』第3巻に随時、立ち入ることとする。現行版テキストの第3巻は、第1篇を除いて、1864—1865年にマルクスが執筆した「主要草稿」をエンゲルスの手によって整理、編集、加筆されて、1894年に刊行されたものに基づく<sup>2)</sup>。『資本論』第3巻の邦訳としては、ベルケ版を訳出した、岡崎次郎訳『資本論』第3巻、『マルクス＝エンゲルス全集』第25巻第2分冊(大月書店、1967年)がある。最近、社会科学研究所監修・資本論翻訳委員会の手になる『資本論』の訳本が新日本出版社から出版されていたが、マルクスの草稿と対比した『資本論』の全訳が完成した。本稿では、この訳本を使用した。岡崎次郎訳本も参考にした。というよりも、両訳本のよいところをとることにした。引用頁は、引用文の末尾に、KⅢ—という形で示した。

## 1 農業資本の低位な構成と土地所有

先ず、マルクスが絶対地代を説明するために置いている二つの前提についての考察からはじめることにしよう。二つの前提というのは、農業資本の構成が工業資本に比べて相対的に低いことにより農業生産物の価値がその生産価格よりも高いということが一つであり、いま一つが、諸資本の競争にたいする土地所有の抵抗のためにその価値がその生産価格にまで引き下げられることがないということである。

2) 大野節夫「価値の生産価格への転化——『資本論』第3部草稿での理論構成の探求」, 同志社大学『経済学論叢』第39巻, 第1号(1987年12月)185ページ。

(a) 農業資本の相対的に低位な構成。マルクスは、これについて以下のように述べている。すなわち、「ただ農業はブルジョア的基礎のうえでは、工業よりも相対的により不生産的に、または、よりゆっくりと労働の生産力を発展させるだけである」(傍点は原文のイタリック体。手稿—485ページ)と。また、「農業では相対的に手仕事がお重きをなしており、また農業よりも製造工業を急速に発展させることがブルジョア的生産様式に特有なものだ」(手稿—485ページ)とも述べている。

この農業資本の低位な構成によって、農業の特殊的利潤率が平均利潤率または一般的利潤率よりも高いことを以下のように述べている。

「あるいはなお、より一般的に言えば、農業は、工業の生産部面のうち、不変資本にたいする可変資本の割合が工業部面の平均よりも高い部類に属する。だから、農業の剰余価値をその生産費にたいして計算すれば、工業部面の平均よりも高くならざるをえない。これはまた、農業の特殊的利潤率が平均利潤率または一般的利潤率よりも高いことを意味する。これまた、生産の各部面における特殊的利潤率は、剰余価値率が等しくまた剰余価値そのものが与えられていれば、特殊的部面における可変資本の不変資本にたいする割合によって定まる、ということの意味する。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—484ページ)

(b) 諸資本の競争に対する土地所有の抵抗について。マルクスは、農業生産物の価値が平均価格を越える超過分を、土地所有の抵抗のために諸資本は平均化することができないということについて、以下のように述べている。

「土地所有は、ただ諸資本間の競争が諸商品の価値の規定を変更するかぎりでのみ、諸資本の行動に——それらの競争に——影響を及ぼし、それを麻痺させることができるのである。価値の生産価格への転化は、ただ資本主義的生産の発展の帰結であり結果でしかないのである。本源的なもの(平均的に)は、諸商品がその価値どおりに売られる、ということである。このことから偏差が農業では土地所有によって阻止されるのである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—614ページ)

この点について、マルクスは、繰り返して述べている。以下に、一、二引用しておく。

「次のことを証明するべきであろう。すなわち、農業は、その商品価値がその平均価格よりも高い特殊な生産部面に属し、したがって、その利潤は、農業がそれをみずから取得して一般的利潤率の平均化に委ねないとすれば、平均的利潤よりも高く、したがって、この平均利潤のほかになお超過利潤をもたらす、ということ。この第1の点は、平均的な農業については確実であるように見える。というのは、農業では相対的に手仕事がお重きをなしており、また農業よりも製造工業を急速に発展させることがブルジョア的生産様式に特有なものだからである。それにしても、これは歴史的な相違であって、消滅しうるものである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—485ページ)

「証明すべきことは、なぜ原生産においては——例外的に、また、工業生産物のうちで価値が同じようにその平均価格よりも高い部類とは違って——価値が平均価格にまで引き下げられないで、したがってまた超過利潤を、別の言葉で言えば地代を、もたらすのか、ということである。このことは単に土地所有からのみ説明される。平均化はただ資本対資本についてのみ行われる。というのは、資本はただ資本にたいして、資本の内在的な諸法則を遂行する力をもつただからである。そのかぎりでは、地代は独占から導きだす人々は正しい。土地所有の独占は、ちょうど資本の独占のみが資本家をして労働者から剰余労働を搾取するのを可能にさせるように、土地所有者をして資本家から、恒常的超過利潤を形成するはずの剰余労働部分を搾取することを可能にさせるのである。地代を独占から導きだす人々の誤りは、彼らが、独占は土地所有者をして商品の価格をその価値よりも高くすることを可能にさせる、と信じていることに

ある。反対に、それは、その商品の平均価格を越えるその価値の維持を、商品のその価値よりも高くでの販売ではなくその価値どおりでの販売を、可能にするのである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—485ページ)

要するに、マルクスの言う所は次の言葉に尽きるのである。すなわち、「とにかく地代を生むのは、農業では不変資本にたいする可変資本の割合が工業におけるよりも大きいからである。すなわち、より多くの新しい労働が対象化された労働につけ加えられなければならないからである。——そして、土地所有の結果として平均価格を越える価値のこの超過分が諸資本の競争によって平均化されないからである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—488ページ) ここで言う地代とは、最劣等部類の土地の生産物の価値、または市場価値の一般的生産価格を越える超過分、つまり絶対地代のことなのである。

## 2 農業生産物の生産価格の形成

マルクスは、穀物の生産価格が、農業資本の相対的に低位な構成を前提として、農業利潤が工業利潤によって規制されると説く。マルクスは言う、「歴史的にも——資本主義的生産が農業では製造工業よりも遅れて現れるかぎり——農業利潤は工業利潤によって規定されるのであって、その逆ではない。利潤を支払うが地代を支払わないこの土地——すなわちその生産物を生産価格で売るこの土地において、平均利潤率が現れ、明瞭に表わされる、ということだけは正しいが、しかし、平均利潤がこれによって規制されるということは決して正しくはないのであって、これは非常に違ったものである」(傍点は原文のイタリック体。手稿—693ページ) と。

歴史的にも農業利潤が工業利潤によって規制されるということの根拠については、『資本論』第3巻第47章「資本主義的地代の創生記」における次の叙述が示唆的である。すなわち、「土地所有者と現実に労働する耕作農民とのあいだへの資本主義的借地農場経営者の介入とともに、」「彼が土地所有者にたいしてどれほど多く、またどれほど少なく引渡すかは、平均的には、限界としては、資本が非農業生産諸部面で生み出す平均利潤によって、またこの平均利潤によって規制される非農業的生産価格によって、規定される。」(KⅢ—808) ここに、非農業とは、「農村地域の諸関係の外部で」の「都市商業および製造業」(KⅢ—808)のことを指しているとも考えられるが、マルクスは、しばしば、農業に対比して製造工業に言及するとき、製造工業を非農業と呼んでいる。ついでに述べておけば、マルクスの対象とする本来の農業とは、「主要植物性食物を生産する農業のことである。」マルクスは言う、「だが地代を規定するのは、このような部門〔牧畜業のこと——東井〕ではなくて、本来の農業であり、しかも、農業のうちの、小麦などのような主要生活手段を生産する部分なのである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—594ページ)。本稿で言う農業とは、マルクスにしたがって「本来の農業」のことであり、したがって農業生産物は穀物——たとえば小麦——のことなのである。

歴史的には、工業に遅れて成立した農業において、資本家的借地農業者が資本主義的生産に参入したときに、一定の農業資本がつくりだす剰余価値を利潤と地代とに分配するための基準を、工業部面ですでに形成されていた平均利潤率、一般的利潤率に求めたのである。理論的には、農業生産物の価値の、その生産価格を越える超過分が、土地所有者に横取りされて、農工の相異なる生産部門間で、一般的利潤の形成の過程に入ることができないからである。マルクスは、農業生産物の生産価格を規制する一般的利潤率、または農業利潤を規制する工業利潤が、農業以外の工業部面において、農業資本とかかわりなく形成されることについて、しばしば言及しているが、その一例を以下に挙げている。

「ところで、利潤率——利潤の自然率——は、農業以外の産業に充用される諸資本の総体がつくりだす諸商品の総体の価値によって与えられている。すなわち、それは、この価値のうち、商品に含まれている不変資本の価値・プラス・労賃の価値を越える超過分である。かの総資本がつくりだす総剰余価値は利潤の絶対量をなしている。この絶対量の前貸総資本にたいする割合が一般的利潤率を決定する。したがって、この一般的利潤率もまた、単に個々の資本家にとってだけではなく、それぞれの特殊な生産部面における資本にとっても、外的に与えられたものとして現れる。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—605ページ)

以上みてきたように、農業利潤は工業利潤によって規制されるのである。農業資本の構成は工業資本の構成に比べて相対的に低く、工業利潤によって規制される農産物の生産価格よりもその価値は高いのである。これについて、マルクスは言う、「次のようなことがわかる。すなわち、生産部面が違えば——たとえば工業と農業とのあいだでは——価値が平均価格よりも高いということは、超過利潤すなわち平均価格を越える価値の超過分を生む生産部面のほうが豊度はより低いということを示す。これに反して同じ部面では、その資本の生産性が同じ生産部面のなかの他の諸資本に比較してより大きいことを示す。前記の例においてⅠ〔土地種類Ⅰ号地のこと——東井〕がとにかく地代〔＝絶対地代——東井〕を生むのは、農業では不変資本にたいする可変資本の割合が工業におけるよりも大きいからである。すなわち、より多くの新しい労働が対象化された労働につけ加えられなければならないからである。——そして、土地所有の結果として平均価格を越える価値のこの超過分が諸資本の競争によって平均化されないからである」(傍点は原文のイタリック体。手稿—488ページ)と。

農業生産物の価値がその生産価格よりも高く、この価値の生産価格を越える超過分が利潤率の平均化の過程に入らないわけについて以下のように述べている。

「商品の価値がその生産価格と区別され、諸商品が必然的に三つの部類に分かれて、そのうち第1の商品の生産価格はその価値に等しく、次の商品の価値はその生産価格よりも低く、そして第3の商品の価値はその生産価格よりも高いとすれば、農業生産物の価格が地代を生むという事情は、ただ、農業生産物はその価値がその生産価格よりも高い商品部類に属する、ということを示すだけである。まだ解決すべく残されている唯一の問題は、なぜ農業生産物の価値は、その価値と同じくその生産価格よりも高い他の諸商品の場合とは違って、諸資本の競争によってその生産価格まで引き下げられないのか? ということであろう。その答えはすでにその問いのなかに含まれている。——中略——つまり、土地所有の単なる存在ということだけで、問題の答えになっている。資本がないうことは、ただ、農業を資本主義的生産の諸条

件に従属させるということだけである。とはいえ、資本主義の生産は、農業生産物のうち資本がそれ自身の行為によってではなくただ土地所有の非存在という前提のもとでのみ取得できるような一部分について、土地所有から、その支配力を奪い取ることはできない。このことが前提とされるならば、資本はむしろ、価値のうち生産価格を超える超過分を土地所有者にまかさなければならないのである。この相違そのものは、ただ資本の有機諸成分の構成における相違からのみ生ずる。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—564ページ)

要するに、農業資本の相対的に低位な構成のために、穀物の価値はその生産価格よりも高い。諸資本の競争は、土地所有の抵抗にあって、穀物の価値をその生産価格まで引き下げることができないのである。したがって、穀物は、その価値とおりに売られるということになる。

### 3 穀物の市場価値の概念とその規定

市場価値の概念および市場価値についてのマルクスの所説を聞くことにする。

先ず、市場価値の概念についてみることにする。マルクスは、次のように述べている。

「一般的結論は次のとおりである。この部類の諸生産物がもつ一般的価値は、これと各個の商品の個別的価値との比がどうであろうとも、すべての商品について同じである。この共通な価値こそ、これらの商品の市場価値であり、それらの商品が市場に出てくるときの価値である。この市場価値の貨幣での表現が市場価格であって、それは、価値の貨幣での表現が一般に価格であると同様である。現実の市場価格は、この市場価値よりもときには高く、ときには低く、それに一致することは偶然にすぎない。しかし、ある一定期間では諸変動は平均されるのであって、現実の市場価格の平均が市場価値を表わす市場価格である、ということが出来る。現実の市場価格が、大きさの点で、量的に、ある与えられた瞬間にこの市場価値に一致するにせよ一致しないにせよ、いずれにしても現実の市場価格は市場価値と共通な質的規定をもつ。その規定というのは、市場にある同じ生産部面のすべての商品は(もちろん質を同じものと前提すれば)、同じ価格をもつということ、すなわち、事実上この部面の諸商品の一般的価値を表現するということである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—543ページ)

この市場価値の概念は、『資本論』第3巻第10章「競争。市場価格と市場価値。超過利潤」では、次のようになる。「市場価値は、一面では、一つの部面で生産された諸商品の平均価値とみなされるべきであり、他面では、その部面の平均的諸条件のもとで生産されてその部面の生産物の大量をなす諸商品の個別的価値とみなされるべきであろう。ただ異常な組み合わせのもとでのみ、最悪の諸条件または最良の諸条件のもとで生産された諸商品が市場価値を規制するのであり、市場価値自体は市場価格の変動の中心をなす——といっても、市場価格は同じ種類の商品については同じである。」(KⅢ, 187—8) 市場価値に関する諸規定については、以下のよう

に述べられてある。「一つの部面全体の生産物をなす、市場に現存する商品総量」のうち「これらの商品の大量がほぼ同じ標準的な社会的諸条件のもとで生産されており、したがってこの価値は、同時に、この商品量を構成する個々の商品の個別的価値でもある、と仮定しよう。いまもし比較的小さい一部分はこの諸条件よりも悪い条件のもとで生産され、他の一部分はそれよりもよい条件のもとで生産されており、それゆえ、一方の部分の個別的価値は大部分の商品の中位価値よりも大きく、他方の一部分の個別的価値はそれよりも小さいが、しかしこれら両極は相殺され、その結果、両極に属する諸商品の平均価値は中位の総量に属する諸商

品の価値に等しいとすれば、その場合には、市場価値は、中位の諸条件のもとで生産された諸商品の価値によって規定される。／これに反して、市場に投じられた当該商品の総分量は同じままであるが、しかしより悪い諸条件のもとで生産された諸商品の価値がよりよい諸条件のもとで生産された諸商品の価値と相殺されないために、より悪い諸条件のもとで生産された商品量部分が中位の分量に比べても他方の極に比べても、相対的にいちじるしく大きいものと仮定すれば、その場合には、より悪い諸条件のもとで生産された商品大量が市場価値または社会的価値を規制する。」(KⅡ, 192)

この市場価値に関する諸規定は、より粗い形にせよ、『剰余価値学説史』Ⅱにおいても、以下のように述べられてある。

マルクスは、「たとえば綿布製造業における個々の資本家がそのもとで生産を行うところの特殊な諸条件が、必然的に三つの部類に分かれる」となし、この三つの部類について次のように言う。「一つの部類は、中位の諸条件のもとで生産するところの個別的生産諸条件は、その部面の一般的な生産諸条件と一致する。——中略——もう一つの部類は、平均的諸条件よりも良い諸条件のもとで生産する。彼らの商品の個別的価値は、同じ商品の一般的価値よりも低い……。最後に、第3の部類は、平均的生産諸条件よりも悪い生産諸条件のもとで生産する。ところで、この特殊な生産部面についての『必要とされる生産物量』は、けっして固定した大きさではない。……。すなわち、この量は、ただ、与えられた価格で必要とされるにすぎないのである。……したがって、最後の部類が自分の商品の個別的価値よりも安く売られなければならないということも、最良の部類がつねにその個別的価値よりも高く売るということも、同じように起こりうる。どの部類が平均的価値を確定するのに決定的であったかということは、主としてこれらの部類の数的関係または比率的数量関係によって定まるのであろう。もし中位の部類が数のうえではるかに優勢であれば、これが平均価値を決定するであろう。この部類が数のうえで劣勢であれば、そして平均的条件よりも悪い諸条件のもとで労働する部類が数のうえで有力かつ優勢であれば、これがその部面の生産物の一般的価値を決定する。といっても、その場合に、その部類内でさらに最も不利な立場に置かれている個々の資本家こそがこの決定をするのだと言おうというのでは、けっしてない。またそうしたことはとてもありそうにもないことである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—543ページ)

さて、マルクスは、綿布製造業における個々の資本家がそのもとでおこなうところの生産諸条件を三つの部類——中位の生産諸条件、劣悪な生産諸条件、最良の生産諸条件——に分けていることに十分留意すべきであろう。マルクスは、諸商品の価値と生産価格との上下関係を三つの部類に分けている。

マルクスは言う、「商品の価値がその生産価格と区別され、諸商品が必然的に三つの部類に分かれ、そのうち第1の商品の生産価格はその価値に等しく、次の商品の価値はその生産価格よりも低く、そして第3の商品の価値はその生産価格よりも高いとすれば、農業生産物の価格が地代を生むという事情は、ただ、農業生産物はその価値がその生産価格よりも高い商品部類に属する、ということだけを示すだけであろう。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—563ページ)

マルクスは、こうも言っている。すなわち、「農業生産物の価値は、他の全商品のうちの大きな部類を占めるすべての商品の価値と同じように、それらの平均価格よりも高く、しかも、これらの他の商品の場合と違い、土地所有の結果として平均価格に均等化されない。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—523ページ)

「農業生産物はその生産価格よりも高い」ということは、農業資本の有機的構成が工業に比べて相対的に低いということから生じうるのである。「農業生産物の価値は、他の全商品のうち大きな部類を占めるすべての商品の価値と同じように、その平均価格よりも高く、」ということとは、「平均的条件よりも悪い条件のもとで労働する部類が数のうえで有力かつ優勢であれば」という場合に匹敵するであろう。または、『資本論』第3巻第10章での「より悪い諸条件のもとで生産された商品量部分が中位の分量に比べても他方の極に比べても、相対的にいちじるしく大きい」という場合における悪い諸条件のもとで生産されてその生産部面で大量をなす商品に、「他の全商品のうちの大きな部類を占めるすべての商品」が適合していると思われる。これらのマルクスの叙述から次のことが類推できないであろうか。すなわち、①劣等な部類の土地が他の種類の土地、たとえば少数の優等地に比べて大多数であるということ、②これらの劣等部類の土地で生産される穀物量は、穀物総量のうち大きな部分を占めているということ、③これらの穀物の価値は平均価格よりも高いということである。

いずれにしても、マルクスは、劣等部類の土地は優等な種類の土地に比べて、圧倒的な広がりをもって存在したとの考えに立つであろう。この考え方を決定づけるものとして、『資本論』第3巻第40章「差額地代第2形態」における以下の叙述がある。

「資本主義的生産様式は徐々にかつ不均等にしか農業をとらえないのであり、それは、農業における資本主義的生産様式の古典的な国であるイギリスで見られるとおりである。自由な穀物輸入が実存しない限り、または自由な穀物輸入量が制限されていてこの輸入の影響がほんのわずかである限りでは、より劣等地で、すなわち平均的な生産諸条件よりも不利な諸条件のもとで働く生産者たちが、市場価格を規定する。農業で使用される、また一般に農業が自由に使用できる資本総量の一大部分はこれらの生産者たちの手にある。」(KⅢ, 689)

マルクスがみていた資本主義的農業の生産様式の古典的な国イギリスにおいては、優等地が限られていて、劣等部類の土地が広範囲に存在していたのではなかろうか。もしそうだとすれば、少数の優等地に比べて大多数の劣等地で生産されて穀物総量の大量をなす穀物量の価値が市場価値を規定するのである。以下、この規定の仕方を「支配的大量規定」と呼ぶことにする。

ついでに述べておけば、最劣等部類で生産されて穀物総量の大量をなす穀物量の価値が市場価値を規制する場合には、この穀物の価値は、平均価値に近似的に現れる。この穀物の市場価値が平均価値にどの程度まで近づくまたは結局それと一致するかは、もっぱら劣等部類の土地で生産された穀物総量が当該穀物部面のなかで占める割合に依存する(KⅢ, 194参照)。

ところで、『資本論』第3巻第10章での、悪い生産諸条件のもとで生産されてその全商品量



の大量をなす商品量の価値が市場価値を規定する場合での市場価値の規定は、しばしば、「平均原理」に基づくと解される。その理解が正しければ、最劣等部類の土地で生産されて穀物総量の大量をなす穀物量の価値が市場価値を規定する場合には、この規定は「平均原理」に基づくということができるのである。

ここで、マルクスの計算例にしたがって、市場価値を示すことにしよう。

「すなわち、農業生産物が、他の生産物とは違って、土地所有があるために、その生産価格ではなくその価値どおりに売られるところの、正常な事態とみなすのである。平均利潤が10%であるとき、総資本の構成は $C^{80}+V^{20}$ である。われわれの仮定では、農業資本の構成は $C^{60}V^{40}$ であり、言い換えれば、その構成では、その他の産業部門で投ぜられる資本の総額におけるよりもより多くが労賃——直接的労働——に投ぜられる。これは、この部門における労働の生産性の発展が相対的により低いことを示している。もちろん、農業のうちのいくつかの種類、たとえば牧畜業では、構成が $C^{80}+V^{10}$ であるかもしれない。つまり、 $V:C$ の比率が全産業資本におけるよりも小さいかもしれない。だが、地代を規定するのは、このような部門ではなくて、本来の農業であり、しかも、農業のうちの、小麦などのような主要生活手段を生産する部分なのである。他の諸部門における地代は、|| 595 | それらの部門自体に投下されている資本の構成によって規定されているのではなく、主要生活手段の生産に使用される資本の構成によって規定されているのである。資本主義的生産の単なる存在が、動物性食物ではなく植物性食物を生活手段の最大の要素として前提しているのである。」(剰余価値率が50%、と仮定されている。傍点は原文のイタリック体、|| — | の記号は手稿ノートの595ページの始まりを示す。)

上の例にしたがえば、 $C^{60}V^{40}$ の構成をもつ100という農業資本によってつくりだされた農業生産物の価値は、剰余価値率が50%である仮定のもとでは、120であろう。 $C^{80}V^{20}$ の構成をもつ100という工業資本がつくりだす剰余価値は、同じ剰余価値率では、10であり、平均利潤率は、10%であろう。10%というこの一般的利潤率に規制される農業的生産価格は、110である。諸資本にたいする土地所有の抵抗のために、農業生産物はその価値どおりに売られる。その価値のうち一般的生産価格を越える超過分10%は、土地所有者が土地所有の力によって、絶対地代として横取りするのである。

マルクスは言う、「絶対地代が10%であるためには、非農業資本の一般的平均構成= $C^{80}V^{20}$ 、農業資本のそれ= $C^{60}V^{40}$ ということが前提されているのである」(手稿—595ページ)と。

さらに、市場価値の計算例を示すことにする。

「100の資本(不変資本と可変資本)が投ぜられ、この資本によって動かされる労働は、前貸総資本の5分の1に等しい剰余労働(不払労働)を、すなわち100/5に等しい剰余価値を提供する、と仮定されている。したがって、前貸資本が100ポンドならば、総生産物の価値は120ポンドでなければならないであろう。さらに、平均利潤は10%だと前提すれば、総生産物の、前記の例では石炭の、生産価格は110ポンドである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—575ページ)「……、資本の総生産物が60トンで、したがって60トンが、120ポンドに値し、言い換えれば、120ポンドに物質化されている労働時間を表わすとすれば、1トンの価値は2ポンドである。」(同上)「このように、商品1個当たりの価格は、100の資本によって生産された商品量の総価値を商

品の総数で割ったものに等しいとすれば、総価値は、商品1個当たりの価格に個々の商品の総数を掛けたもの、または、個々の商品の一定の単位量の価格に、この度量標準で計った商品量の総数を掛けたもの、に等しい。」(手稿—576ページ)

100の資本によってつくりだされた生産物60トンの総価値が120ポンドで、この総生産物全体の可除部分としての1トンの価値は2ポンドである。ポンドは価値の貨幣的表現であって、各ポンドは、それに物質化されている労働時間を表わすものとする、念のために。マルクスはこの生産物の総価値を市場価値と呼んでいるし、この総価値の可除部分である1トン当り2ポンドの価値をも市場価値と呼んでいる。このことは、『資本論』第3巻第10章のなかでの次の叙述に符合する。すなわち、「この市場価値は、単位として役立つ商品または商品度量単位の市場価値の倍数で表現されうる。」(KⅢ—196)

さて、この商品の1トンの価値が2ポンドというときに、この1トンの価値は、まさしく平均価値なのである。この平均価値によって市場価値が規定されるのである。この資本は、最劣等部類の土地に投下されているのである。農業部面において、最劣等部類の投下される資本を考慮におけば足りるのである。どの部類に属する土地に投下された資本がつくりだす農業生産物の平均価値が市場価値を規制するかは、後にみるように、競争——市場では需給関係——によって、決まる、というのであろう。この競争による市場価値の規定と、「支配的大量規定」による市場価値の規定との整合性については、マルクスの叙述からよみとることはできないが、需給関係は生産諸条件の組み合わせを規定する、といえよう。

この10%という平均利潤は、工業資本のものであり、これによって規制される生産価格は、60トンが110ポンドであり、1トン当たりのそれは $1\frac{5}{6}$ ポンドである。この石炭が1トン当たり2ポンドという市場価値どおりに売られるならば、 $1\frac{5}{6}$ ポンドという生産価格との差が $\frac{1}{6}$ ポンドである。これが絶対地代である。

周知のように、『剰余価値学説史』Ⅱでは差額地代と絶対地代とが併存して論じられている。したがって、差額地代論での市場価値とが、まざりあっているような感があって、みきわめがむつかしくなっていることも事実である。差額地代論では、土地所有が捨象され、一般的生産価格にまで引き下げられた市場価値であり、絶対地代論では、市場価値は、最劣等部類の土地での現実の価値を、市場で表わす。穀物は、生産価格よりも高い市場価値どおりに売られるのである。

これに反して、マルクスは、新しく耕作された最劣等地で生産される穀物の追加的供給に追加的需要があって、この穀物がその価値どおりに売られるような場合には、この穀物の価値は、市場価値を決定する、と述べている。これについて、マルクスは以下のように述べている。

マルクスは言う、「リカードウが仮定しているのは下降線である。彼の仮定では、最劣等地は最後に耕作されるのであり、しかも、ただ、追加的需要が最後に耕作される最劣等地から得られる生産物の価値での追加供給を必要とした場合に(前提された場合に)のみ、耕作されるので

ある。この場合には、**最劣等地**の「**生産物の——訳者**」**価値が市場価値を規制する**」(傍点は原文のイタリック体。ゴシック体は東井。手稿—617ページ)と。また言う、「もし追加供給が必要であるか、または上昇した市場価値のもとでそれが許されるとすれば、最劣等地が市場価値を規制するであろうが、その場合にはまた絶対地代をも生むであろう」(傍点は原文のイタリック体。ゴシック体は東井。手稿—618)と。

最劣等地でえられる生産物の価値での追加供給に追加需要がある場合には、最劣等地の生産物の価値が市場価値を規制する。この場合には、最劣等地の穀物の多寡にかかわらず、市場価値の決定がおこなわれている。この市場価値の規定は市場価値の「支配的大量規定」とはなんらの関係もみいだすことはできないのである。最劣等地の穀物の価値がかように規制する市場価値は、一般に、『資本論』第3巻第10章での市場価値の概念、すなわち、「一面では、一つの部面で生産された諸商品の平均価値」、「他面では、その部面の平均的諸条件のもとで生産されてその部面の生産物の大量をなす諸商品の個別的価値」からはまったく背離してしまうのである。もっとも、『剰余価値学説史』での市場価値の概念、つまり、穀物が市場に出るときにもたねばならない「共通の価値」という規定とは矛盾しないが、それでもなお、『剰余価値学説史』において、「平均的条件よりも悪い条件のもとで労働する部類が数のうえで有力かつ優勢であれば、これがその部面生産物の一般的価値を決定する」という「支配的大量規定」とどのような整合性をもたせばよいのかということを追究してみる価値がある。この問題はマルクスの叙述から解きようがないが、この市場価値は生産価格を表わす市場価格のようである。

#### 4 差額地代と市場価値

マルクスは、差額地代について以下のように書いている。

「最劣等地に投下された資本は、ただ投下の仕方が特殊な投下種類だということによってのみ製造工業に投下された資本と区別される資本である。だから、ここでは諸価値の法則の一般妥当性が出現してくる。**差額地代——そしてこれが——優等地での——唯一の地代である——**は、各生産部面における一つの同じ市場価値に基づいて平均的諸条件よりも優良な諸条件のもとで仕事をする諸資本が生みだす超過利潤にはかならないのであって、それがただ農業ではその**自然的基礎……**の代表者である**土地所有者**のために、資本家のポケットにではなく土地所有者のポケットに流れこむのである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—563ページ)

この市場価値について二つのことを指摘しておきたい。一つは、この市場価値は、生産価格によって規制される市場価格に等しいと前提されている、ということであり、もう一つは、農業と工業との両生産部面において競争が成立させるのは生産価格であって、農業内部で競争によって成立するのが市場価値である、ということである。先ず、後者の点についての、マルクスの叙述をみることにする。

マルクスは、市場価値と生産価格について以下のように述べている。「同じ生産部面のなかの競争の結果として生ずるものは、この部面の商品の価値をその部面で平均的に必要とされる労働時間によって規定すること、つまり市場価値の成立である。別々の生産部面間の競争の結果として生ずるものは、異なる市場価値を市場価格に、すなわち——現実の市場価値とは違う——生産価格を表わすような市場価格に、均等化することによって、別々の部面間に同じ一般的利潤率を成立させることである。したがって、この第2の場合の競争は、けっして商品の価格をその価値に同一化しようとするものではなく、逆に、商品の価値をそれとは違う生産価格に帰着させ、商品の価値と生産価格との違いを廃棄しようとするものである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—545ページ)

農業部面内部において競争が成立させるのは、市場価値である。農業と工業との異部門間では、競争が生産価格を成立させるのである。差額地代が、市場価値——平均的市場価格——と、優等地での生産物の個別的価値との差額としてとらえている限りでは、農業生産部面内部での市場価値の成立を説けば足りるのである。この手法をマルクスが用いているようである。しかし、一般的生产価格と個別的生产価格の差としてとらえる場合には、農業の生産価格は、工業部門で独自に形成される一般的利潤率で規制されなければならない、農工の両生産部面で競争が成立させる生産価格が問題となっているのである。

マルクスは、市場には「いろいろに生産性の違う諸炭鉱の生産物である石炭があるので……、これらの炭鉱に最低の豊度を初めにしてⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳという記号をつけて」いる。「たとえば第1の部類では100ポンドの資本の生産物が60トンであり、第2の部類ではそれが65トンである、等々。つまり、同じ大きさの資本——同じ生産部面のなかにあって同じ有機的構成をもつ100ポンド——がここでは不等な生産性をもつのであるが、それは、炭鉱や土地種類の、要するに自然的要因の、生産性の程度に応じて労働の生産性の程度が違っているからである。しかし、競争は、それぞれ違った個別的価値をもっているこれらの生産物について一つの市場価値をつくりだす。この市場価値そのものは、豊度の最も低い部類の生産物の個別的価値よりも大きいことはけっしてありえない。もし市場価値がそれよりも高いとすれば、それは、ただ、市場価格が市場価値よりも高いということを示しているだけであろう。とはいえ、市場価値は現実の価値を表わさなければならない。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—577ページ)重ねて、マルクスは、「しかし、ここで論じられている市場価値が——そしてここでは市場価格と等しいと前提されている市場価値が——それ自身よりも高いということはあるまいのである」(傍点は原文のイタリック体。手稿—579ページ)と言う。

ところがマルクスは言う、「市場価値が最劣等な生産条件のもとで生産されながら必要な供給の一部分をなす生産物の個別的価値よりも高くなることはありえないというこの法則を、リカードウは、市場価値がこのような生産物の価値よりも低くなることはありえないし、したがってつねにこの価値によって規定されなければならないというように、ねじ曲げるのである。

これがどんなにまちがいであるかを、もっとあとで見るであろう。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—580ページ)と。

これについては、「どの部類が市場を支配しているかの関係」いかにによっては必ずしも最劣等地の穀物の価値が市場価値を規定しないというのであろう。この点については手稿ノートの600—01ページを参照されたい。

ともあれ、最劣等部類の土地の価値が市場価値を規定し、この市場価値は、その生産価格よりも高いということを確認しておこう。

マルクスは、差額地代を論じるにあたっては、市場価値と生産価格とが等しいかのように論述している。市場価値と生産価格とが等しくなるためには、資本の有機的構成の相違をさしあたり捨象しておくか、土地所有の非存在を前提とするかである。

先ず、資本の有機的構成の相違の捨象についてみよう。マルクスは、価値または市場価値が生産価格と等しくなるのは、「農業資本が  $C^{80}V^{20}$  で非農業資本の平均構成と同じであり、したがって農業生産物の価値が非農業生産物の生産価格に等しいという場合である。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—595ページ)しかし、マルクスは、その文にすぐつづいて、「これは、さしあたり統計的にまちがいである」(同上)と指摘している。さらに、これについてマルクスは、以下のように述べている。

「ある国において農業資本の構成が非農業資本の平均的構成と等しいとすれば、事情は違うであろう。このことは、農業の高度の発展か工業の低度の発展かを前提とするものである。このような場合には、農業生産物の価値はその生産価格に等しいであろう。この場合にはただ差額地代だけが支払われるであろう。差額地代を生むことなくただ農業地代だけを生みだしうる地所は、この場合には、少しも地代を支払うことはできない。なぜならば、借地農業者が生産物をその価値どおりに売っても、それはただその生産価格を補填するだけだからである。したがって、彼は少しも地代を支払わない。……。しかしながら、工業の——したがって資本主義的生産の——発展の低いところでは、資本家的借地農業者は存在しないのであって、資本家的借地農業者は農村における資本主義的生産を前提とするのである。このようなところでは、土地所有がただ地代として経済的にのみ存在するような経済組織とはまったく別な諸関係が考慮のうちにはいってくる。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—649ページ)

マルクスは、差額地代論においても資本の有機的構成を捨象しているとは考えられないのである。というのは、生産価格と現実の価値とを同一視して絶対地代を否定するリカードウの地代理論を批判しているマルクスが、生産価格と価値とを等しくしてしまうような資本の有機的構成の捨象をするとは考えられないからである。また、農業利潤が工業利潤によって規制されるという命題は、資本の有機的構成の相違の捨象のもとでは間が抜けたものになってしまうから有機的構成の捨象は考えることができないのである。『剰余価値学説史』ではたしかに、絶対地代と差額地代とが併存して展開されている。絶対地代の存在を説くためには、資本の有機的構成の相違と土地所有の存在とを前提としなければならない。しかしながら、工業資本の平均的構成と農業資本の構成とが等しいという仮定は、非現実的である。なぜならば、「かりに農業において価値と生産価格とが一致するとすれば、農業はむしろ工業の例外的な一部分に属

することになるであろう」(手稿—648ページ)からである。

資本の有機構成の相違を前提としていても、土地所有を捨象すれば、市場価値は生産価格に等しくなるのである。『資本論』第3巻第50章「競争の外観」での以下の叙述を見よう。

「もし商品価値の生産価格への均等化がなんらの障害にも出合わないならば、地代は差額地代になってしまう。すなわち、地代は、規制的生産価格によって一部の資本家たちに与えられるであろうが、いまや土地所有者によって取得される超過利潤の均等化に限定される。ここでは、地代は、一般的利潤率による生産価格の規制によってもたらされる個別的利潤率の偏差のうちにその特定の価値限界をもつのである。土地所有が商品価値の生産価格への均等化をさまたげ、絶対地代を取得するならば、この絶対地代は、土地生産物の価値がその生産価格を超える超過分によって、したがって、諸土地生産物に含まれている剰余価値が、一般的利潤率を通じて諸資本に帰属する利潤率を超える超過分によって、限界づけられている。その場合には、この差額が地代の限界をなすのであり、地代は依然として、与えられた、諸商品に含まれている、剰余価値の一定部分をなすにすぎない」(ゴシック体は東井。KⅢ, 868)

みられるように、資本の有機構成の相違を前提としても、「商品価値の生産価格への均等化」を妨げる土地所有の作用を度外視すれば、価値は、生産価格に等しくなる。したがって、価値を表わす市場価値と生産価格とが等しくなるのである。『剰余価値学説史』での次の叙述は、注目に値する。

「{競争においては均等化の二重の運動を区別するべきである。同じ生産部面内部の諸資本は、この部面の内部で生産された諸商品の価格を同じ市場価格に均等化するのであって、それは、これらの商品の価値がこの価格とどのような関係にあるかを問わない。かりに別々の生産部面のあいだの均等化がないとすれば、平均的な市場価格は商品の価値に等しくなければならないであろう。これらの別々の部面のあいだでは、諸資本相互の活動が第三の要素——土地所有など——によって妨げられ乱されないかぎり、競争は諸価値を平均価格に均等化するのである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—502ページ)

マルクスは、また以下のようにも言う。

「別々の部面間では、市場価値または平均的市場価格は、同じ平均的利潤率を生む生産価格に帰着させるということをひとたび前提すれば——{だが、このことは土地所有が介入しない部面においてのみ生ずる。土地所有が介入する部面では、同じ部面のなかの競争は、価格を価値どおりに、また価値を市場価値として、成立させるのであるが、この市場価値を生産価格にまで引き下げることはない}、特殊な場面における市場価格の生産価格からのかなり恒久的な偏差、すなわち生産価格を越える上昇またはそれ以下への下落は、社会的資本の新しい移動と新しい配分をひき起すであろう。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—545ページ)

上に引用した二つの叙述から読みとれることは、第1に、市場価値が平均的市場価格に等しいとされていることである。たとえば、工業の社会的資本の構成が $80C + 20V$ で、剰余価値率が50%であるとすれば、生産価格は110であり、価値は110である。農業資本の構成が $60C + 40V$ であるとすれば、同じ剰余価値率のもとでは、生産物の価値は120であろう。仮に、「農

業生産物が非農業生産物と平均価格に均等化されるとすれば（簡単にするため両生産部門での総資本は等しいとする）、総剰余価値は30、すなわち200の資本にたいし15%であろう（KⅢ, 772, 参看）。平均的市場価格は、115である。土地所有を捨象してこの平均的市場価格が表わす「一般的価値」が、市場価値としてとらえられている。差額地代を説明するために、この平均的市場価格と市場価値が等しいと前提されているように思われてならない。

第2に、資本の有機的構成の相違が前提とされているが、土地所有が捨象されているということである。土地所有が介入してくると、農業生産部面内部の競争は、「価格を価値どおりに、また価値を市場価値として、成立させるのである」。

こういった考えにこだわらずに、差額地代を論じるにあたっては、明快単純に、マルクスも、リカードと同じように、資本の有機的構成の相違と土地所有の介入を捨象して、「最劣等地の生産物の価格がこの生産物の生産価格に等しく、またこの生産物の価値に等しくて——農業生産物の市場価値を規定する」（傍点は原文のイタリック体。手稿—606ページ）と、さしあたり考えておくというのであろうか。そうはどうしても考えられないのである。

マルクスは、「絶対地代はつねに商品の価値がその商品自身の生産価格を越える超過分に等しいが、これに反して、差額地代は市場価値がその商品の個別的価値を越える超過分に等しい」（手稿—579ページ）となしている。差額地代については、他の箇所でも次のように述べている。「（差額地代は、超過利潤と同様に、けっして生産価格のなかにははいらぬ。なぜならば、それは、つねに、ただ市場生産価格を越える個別的生産価格の超過分か、または市場価値を越える個別的価値の超過分ではないからである。）」（傍点は原文のイタリック体。手稿—606ページ）この「市場生産価格」は、原文では「市場費用価格」で、これにMEGAの注解がある。すなわち、「マルクスがここで『市場費用価格 [market costprice]』と言っているのは、ある一定の生産部面における諸商品の市場価格を規制する一般的な費用価格のことである。本書、777ページ（〔本訳書、175ページ〕）を見よ。」費用価格は生産価格の意である。

マルクスは、差額地代を、市場価値——平均的市場価格——が優等な土地種類で産出された生産物の個別的価値を越える差額としてとらえている。「差額地代＝市場価値と個別的価値との差」は、『資本論』第3巻第48章「三位一体的定式」において、再現している。すなわち、「差額地代は、地所の相対的豊度、したがって土地そのものから発生する諸属性に結びついている。しかし、差額地代が第1に異なる土地種類の諸生産物の異なる個別的価値にもとづく限りでは、それはたったいま述べた規定であるにすぎない。差額地代が第2にこれらの個別的価値とは区別される規制的な一般的市場価値にもとづく限りでは、それは、社会的な、競争を媒介として貫徹される一法則であって、これは土地にも、その豊度の差異にも関係がないのである。」（ゴシック体は東井。KⅢ, 830）

以上要するに、市場価値と個別的価値との差額＝差額地代、または一般的生産価格の個別的生産価格を越える超過分＝差額地代という場合に、穀物の市場価値とその生産価格とが等しい

ものと等置されているのは、差額地代では、諸資本の競争にたいする抵抗としての土地所有を捨象してのことであろうということである。

## 5 絶対地代と市場価値

マルクスは、次のように略記する。

「絶対地代＝個別的価値と生産価格の差。／差額地代＝市場価値と個別的価値との差。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—591ページ)

マルクスは、「絶対地代が10%であるためには、非農業資本の一般的平均的構成＝ $C^{80}V^{20}$ 、農業資本のそれ＝ $C^{60}V^{40}$ ということが前提とされているのである」(手稿—595ページ)と言う。この場合に、剰余価値率は50%であると仮定されている。

マルクスは、農業生産物の価値は、農業資本の低い構成にもとづいて、工業資本の一般的利潤率に規制された農業的生産価格よりも高く、諸資本の競争にたいする抵抗のために、その価値どおりに売られる、と説く。生産価格と価値を同一視することによって以下のようにも、マルクスは批判している。

「さらに、なぜ価格は生産価格に、すなわち、前貸・プラス・平均利潤に、等しい高さでなければならないのか？ いろいろな産業における諸資本の競争の、ある産業から別の産業への資本の移動の、結果においてである。つまり、資本にたいする資本の行動によるものである。だが、いったいどんな行動によって、資本は土地所有を強制して生産物の価値を生産価格にまで下がらせるのか？ 農業からの資本の引きあげは、農業生産物にたいする需要の減少を伴わないかぎり、このような効果をもつことはできない。それは、農業生産物の市場価格をその価値よりも高くつり上げるという逆の効果をもつであろう。新たな資本の土地への移動も、やはりこのような効果をもつことはできない。なぜならば、諸資本相互間の競争こそは、まさに、地主が個々の資本家にたいして『平均利潤』で満足してこの利潤を与える価格を越える価値の超過分は地主に、支払え、と要求することを可能にするのだからである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—614ページ)

農業生産物は、その生産価格ではなく、その価値どおりに売られる。その価値が農産物の市場価値を規定する。最劣等部類の土地が供給する穀物に需要がある場合には、資本家的借地農業者が通例の利潤を要求し、土地所有者が絶対地代を要求するかぎり、この最劣等部類の穀物の価値が市場価値を規定する。「絶対地代はつねに商品の価値がその商品自身の生産価格を越える超過分に等しい」(傍点は原文のイタリック体。手稿—578ページ)という理論を前提とすれば、「いろいろな部類の関係に応じて、市場にたいするそれらの関係——すなわちそれらのうちのどの部類が市場を支配しているかの関係——に応じて、次のような種々の場合が生じうる」となして、マルクスは五の場合を挙げている。二つだけ引用しておこう。

「A 最後の部類は絶対地代を支払う。この部類が市場価値を規定する。というのは、すべての部類がこの市場価値でただ必要な供給だけを生産するからである。

B 最後の部類が市場価値を規定し、それは絶対地代を、その全額の率を、支払うが、しかし、以前の全額を支払うわけではない。というのは、ⅢやⅣの競争がこの部類に資本の一部を生産から引き上げるこ



とを強いるからである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—600ページ)

最後に、生産価格＝価値を前提として土地における借地農業者の利潤が一般的利潤率を規制するというリカードウの理論を批判したマルクスの一文を検討しておこう。

「これによれば、土地——リカードウによれば少しも地代を支払わない最劣等地——における借地農業者の利潤が、一般的利潤率を規制するであろう。その推論はこうである。すなわち、最劣等地の生産物は、その価値どおりに売られ、少しも地代を支払わない。したがって、われわれは、ここでこそまさに、生産物の価値のうち労働者のための単なる等価物を控除したのちに資本家の手にどれだけの剰余価値が残るか、がわかるのである。そして、この剰余価値が利潤なのである。このことは、生産価格と価値とが同じであるという前提に、また、この生産物は生産価格で売られるのだから価値どおりに売られるのだという前提に、基づいているのである。／歴史的にも理論的にも、このようなことはまちがいである。私がすでに示したように、資本主義的生産と土地所有とが存在する場合に最劣等部類の土地または鉱山が少しも地代を支払うことができないのは、その穀物〔または鉱山物〕が、その市場価値（これはこの最劣等の土地または鉱山の生産物の価値によっては規制されていない）で売られる場合には、その価値よりも安く売られることになるからである。すなわち、市場価値は、ちょうどその生産価格を補填するだけだからである。しかし、この生産価格はなにによって規制されているのか？ 非農業資本の利潤率によってである。そして、この利潤率の規定には当然穀物価格もまた加わるのである。といっても、けっしてこの穀物価格が単独でそれを規定するわけではないが。リカードウの主張が正しいのは、ただ、価値と生産価格とが同じであるような場合だけであろう。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—692ページ)

ここに「資本主義的生産と土地所有とが存在する」というのは、絶対地代が存在する諸前提が整っているということである。この叙述に先立って、こういう叙述がある。すなわち、「絶対地代が存在するための諸前提……は、一面においては発展した資本主義的生産……、他面においては、ただ法律上存在するだけではなく事実上資本にたいして抵抗を遂行し、資本にたいして活動領域を防衛し、ただ特定の諸条件のもとでのみ資本に余地を与えるような、土地所有……。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—597ページ)

これらについて敷衍的に説明しておこう。先ず第1に、農業的資本主義の成立は、工業資本主義のそれに比べて遅く、その発達も、工業のそれに跛行するために、農業の資本構成は、工業のそれに比べて、低いということである。たとえば、工業資本の構成が  $C^{80}V^{20}$  であるのに対し、農業資本のそれは、 $C^{60}V^{40}$  である。

第2に、農業生産物の価値はその生産価格よりも高いということである。農業生産物の生産価格は、工業資本の平均利潤率または一般的利潤率によって規制されている。たとえば、工業の平均利潤率は、剰余価値率が50%であるという仮定のもとでは、100の資本にたいして10%である。したがって、100の資本がつくりだす農業生産物の生産価格は、110 ( $=100+100 \times$

0.10) である。その農業生産物の価値は、同じ剰余価値率のもとでは、120である。

第3に、土地所有が介入すると、農業生産物の市場価格を、その価値から生産価格まで引き下げることはないということである。

第4に、農業生産物は、劣等部類の土地の生産物の価値、またはこの価値が規定する市場価値で売られるということである。

最後に、資本主義的生産と土地所有の存在を前提するかぎり、農業生産物の生産価格が市場価格を規制するという事は、まったくありえないことである。

いよいよ、問題の叙述に立ち戻ることにする。リカードウが言うように生産価格が価値と同じであると考えるならば、その穀物が、その市場価値で売られる場合には、市場価値は、ちょうど穀物の生産価格を補填するだけだということになる。しかしながら、すでにみておいたようにこのことはまちがっている。穀物の市場価値は、土地所有が介入すれば、最劣等の土地の生産物の価値によって規制されるのである。「非農業資本の利潤率」によって規制される穀物の生産価格は、その価値よりも低い。仮りに穀物の市場価格が生産価格によって規制されるとするならば、その穀物がその市場価格で売られる場合には、「その価値よりも安く売られることになる」。したがって、「最劣等部類の土地……が少しも地代を支払うことができない」のである。しかしながら、そうではなくして、穀物の市場価格を規制するのは、最劣等部類の土地の穀物の生産価格ではなくして、その生産価格よりも高い穀物の価値なのである。農業資本の相対的に低位な構成にもとづき穀物の価値は、工業資本の平均利潤率または一般的利潤率に規制されるその生産価格よりも高いのである。それゆえに、絶対地代が生じうるのである。

要するに、穀物の価値は、農業資本の低位な構成にもとづき、その生産価格よりも高い、なぜならば農業利潤は工業利潤によって規制され、または工業資本の平均利潤率または一般的利潤率によって規制されるからだということである。こうして、マルクスは、「生産価格が価値と同じである」という前提のもとに少しも地代を支払わない土地における「借地農業者の利潤が一般的利潤率を規制する」というリカードウの主張を、徹底的に批判しているのである。

## あとがき

『剰余価値学説史』Ⅱにおける市場価値の成立と生産価格の形成について、マルクスの説く所を整理して、まとめれば、以下ようになる。

マルクスは言う、「同じ生産部面のなかの競争の結果として生ずるものは、この部面の商品の価値を、その部面で平均的に必要とされる労働時間によって規定すること、つまり市場価値の成立である。相異なる生産部面間の競争の結果として生ずるものは、いろいろに違う市場価値を市場価格に、すなわち——現実の市場価値とは違う——生産価格を表わすような市場価格に、均等化することによって、別々の部面間に同じ一般的利潤率を成立させることである。」(前

出)

ここでの「同じ生産部面」を「同じ農業生産部面」と読み替え、「相異なる生産部面間」を「農業と工業という相異なる生産部面間」と読み替えるべきである。マルクスは、そう考えていたに相違ない。

先ずはじめに、農業という同じ生産部面における競争による市場価値の成立についてみよう。農業生産部面のなかにあって  $C^{60}V^{40}$  という同じ構成をもつ 100 ポンドは、「土地種類の、要するに自然的要因の、生産性の程度に応じて労働の生産性の程度が違っているから」不平等な生産性をもつ(前出)。たとえば、100 ポンドの資本が、面積はいずれも同じとすれば、劣等部類の土地では 60 クォーターを生産するが、他の部類では 65 クォーターとか、75 クォーターとかを生産する。剰余価値率を 50% とすれば、資本の総生産物が 60 クォーターで、したがって 60 クォーターが 120 ポンドに値し、言い換えれば、物質化されている労働時間を表わすとすれば、1 クォーターの価値は 2 ポンドである。生産物が 65 クォーターならば、1 クォーター当たりの価値は、 $120/65$  ポンド、すなわち  $1\frac{11}{13}$  ポンドである。生産物が 75 クォーターならば、1 クォーター当たりの価値は、1 ポンド 12 シリングである。「競争は、それぞれ違った個別的価値をもっているこれらの生産物について一つの市場価値をつくりだす。この市場価値そのものは、豊度の最も低い部類の生産物の個別的価値よりも大きいことはけっしてありえない。」(前出)

100 ポンドの資本がうる 60 クォーターの穀物は、最劣等部類の土地の総面積のうち一定の面積にかぎっての収穫高を示す。75 クォーターもまた、優等な土地の部類に属する一定の面積に限っての収穫高である。どの部類の土地の穀物の個別的価値が市場価値を決定するのは、どの部類の土地の穀物量が穀物総量のうち大量を占めるかに依存する。いま劣等部類の土地の穀物量が穀物総量のうち大量を占めるものとするならば、この最劣等部類の土地の穀物の価値が市場価値を規定する。この市場価値は 2 ポンドである。1 クォーターの穀物の市場価値 2 ポンドで、すべての部類の土地で生産される穀物も売られることになる。1 クォーターの市場価値は 2 ポンドである。その「生産部面で支配的な価値、すなわち市場価値は、その生産物の個別的価値を越える超過分を与える。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—578 ページ) 1 クォーターの市場価値が 2 ポンドならば、その個別的価値が 1 ポンド 12 シリングである差額価値は、8 シリングである。1 クォーターの個別的価値が 1 ポンド 12 シリングである部類の土地では 100 ポンドの資本が 75 クォーター生産するのだから、この 75 クォーターの総差額価値は  $8 \text{ シリング} \times 75 = 30 \text{ ポンド}$  である。「この部類の総生産物の市場価値がその生産物の個別的価値を越えるこの超過分は、土地の……豊度が相対的により大きいことによるものであって、この超過分が差額地代を形成するのである。」(傍点は原文のイタリック体。同上)

1 クォーターの穀物の生産価格を規制する利潤率は、差額地代だけを問題にしている限りでは、工業利潤率を考慮する必要がなく、農業の内部だけでその形成を考えればよい、という考えがある。100 ポンドの農業資本がつくりだす剰余価値は、20 ポンドに値し、利潤率は、100

ポンドの資本にたいして20%である。したがって、最劣等部類に投下された100ポンドの資本がつくりだす穀物の生産価格は、120であり、1クォーター当たりの生産価格は、2ポンドである。この2ポンドの生産価格は、2ポンドの市場価値に等しい。農業生産部内部では、資本の有機的構成を捨象してもよい、というのである。この考えには無理がある。

そこで、マルクスは、資本の有機的構成の相違を前提とし、土地所有を捨象して、農工両生産物の平均価格を算出し、この平均価格を市場価値とみなす一方、生産価格ともみなしているようである。または、工業利潤に規制された生産価格を表わす市場価格が市場価値とみなされている。

第2に、農業と工業との相異なる生産部門間で、競争が成立させる生産価格について考える。ここでは、絶対地代が問題となる。非農業資本の一般的平均的構成 $=C^{80}V^{20}$ とし、農業資本のそれ $=C^{80}V^{40}$ とし、剰余価値率を50%とする。

最劣等部類の土地に投下された100ポンドの資本が生産する穀物の価値は、120ポンド——正確には120ポンドに値する労働時間——である。工業部面で独自に形成される平均利潤率または一般的利潤率は10%である。農業利潤は、工業利潤によって規制される。工業資本の一般的利潤率によって規制された穀物の生産価格は、110ポンドである。諸資本の競争にたいする土地所有の抵抗によって、この価値をその生産価格まで引き下げることはいない。

「諸資本の競争がひき起すことができるのは、ただ、ある資本家が穀物生産というこの特殊な生産部面で、100ポンドを投じてつくりだす商品の生産価格が110ポンドに等しい、ということだけである。しかし、諸資本の競争は、その資本家が生産物を、たとえそれが120ポンドに値しようとも、110ポンドで売るということ——ほかの産業では日常行われている強制——を実行させることができない。なぜならば、地主がそのあいだにはいつてきて、10ポンドを押えるからである。それゆえ、この地代を私は絶対地代と呼ぶのである。」(傍点は原文のイタリック体。手稿—577ページ)

この場合に、1クォーターの穀物の生産価格は、 $1\frac{5}{6}$ ポンドである。その価値は、2ポンドである。その市場価値も2ポンドである。

マルクスは、「絶対地代はつねに商品の価値がその商品自身の生産価格を越える超過分に等しい」(前出)と言う。この価値を市場価値に置き替えてもよい。

ところで、有機的構成の相違を前提、土地所有を捨象して農業生産内部で競争が成立させる穀物の市場価値がその生産価格に等しいという場合での生産価格は、1クォーターの穀物の平均価格が、 $1\frac{11}{12}$ ポンドであった。しかし、農業と工業という相異なる生産部面では、穀物の生産価格は、工業資本の一般的利潤に規制されることにより、1クォーターの穀物の生産価格は $1\frac{5}{6}$ ポンドである。両者の生産価格は、まったく値を異にするのである。1クォーター当たり $1\frac{11}{12}$ ポンドという生産価格の成立は、資本の有機的構成の相違を前提として土地所有を捨象したうえでの農工両生産物の平均価格のことである。1クォーター当たり $1\frac{5}{6}$ ポンドという生

産価格は、農業と工業の異部門間で、農業資本の相対的に低位な構成を前提として、工業資本の一般的利潤率に規制されたものである。

農業資本の相対的に低位な構成に基づき、農業的生産価格が工業資本の利潤率によって規制されることを媒介として、農業生産物の価値がその生産価格よりも高いとする。この価値の生産価格を越える超過分が絶対地代と名付けられる。こうなすことによって、マルクスは、生産価格と価値を同一視して絶対地代を否定するリカードウの地代理論を批判しているのである。

マルクスが、工業生産部面を度外視して、農業生産部面にかぎっての生産価格に言及するときには、生産価格は、平均価格および市場価値に等しいものとされている。これに反して、農工の相異なる生産部面において競争が成立させる穀物の生産価格は、農業資本の相対的に低位な構成のために、その価値よりも低く、その価値に等しくないのである。そして、この生産価格は、工業資本の一般的利潤率によって規制されているのである。この点を見極めることが実に重要なことであると思える。なぜならば、マルクスが、絶対地代を見据えて差額地代を論ずるときには、穀物の市場価値はその生産価格よりも高いとし、差額地代だけに限られる場合には生産価格＝市場価値として説かれているから、その見究めがなければ混乱してしまうからである。とはいえ、リカードウの生産価格＝価値をマルクスは否定するのだから、仮説的にせよ、生産価格＝市場価値というべきではなかった。

絶対地代＝個別的価値と生産価格の差。または市場価値と一般的生産価格の差。

差額地代＝市場価値と個別的価値の差。または一般的生産価格と個別的生産価格の差。

〔追記〕 「土地条件は限界的、資本条件は平均的」という差額地代第1形態における井上周八氏が樹立された命題は、やはり金字塔であるかも知れない。氏から受けた学恩に感謝し、同氏の一層のご発展を念じて。